



機巧少女は  
傷つかない  
Facing  
"Palace  
Laplace I"  
Mechanical Machine-Doll

1

マシンドール  
**機巧少女は傷つかない**  
Facing "Palace Laplace I"

海冬レイジ

MF文庫 

【著者】



**海冬レイジ**

かいとう れいじ

機巧少女ラジオ＆ニコ生が面白すぎ！  
ラジオは音泉さま＆AnimateTVさま、  
ニコ生は機巧少女チャンネルで観られます。  
公式ページ [\[machine-doll.com\]](http://machine-doll.com) から  
一発アクセスできるので、観てね聴いてね！

札幌市在住。1月8日生まれ。A型。

【イラストレーター】

**るろお**



カバーイラスト るろお



# Intermission I 断章ラプラスガイスト



1

「えっちな写真集を探す——んですか？」

見目麗しい黒髪の乙女型自動人形、夜々がきよんとして言った。  
雷真はげんなりして、

「その『えっちな』はどこから出てきた。欲しいのは昔の写真を集めたやつだよ」  
「昔のえっちな写真集……っ」

「その単語から離れろー 風景だ風景！ ガイドブックとか、新聞記事とか！」

夜々はたちまち頬を染め、目を潤ませた。両手の指を胸の前でからめ

「嬉しいです……ついに二人は新婚旅行に——」

「成園園まで飛躍したな！ 前提を全部すっ飛ばしたぞ！」

もちろん、結婚もしていなければ、旅行の予定もない。

ここは英国のリヴァプール、王立機巧学院の敷地内。庭園は荒れ果て、木立ちは枯れ、芝は焦土と化している。先日の戦闘の影響で、学内はひどく荒涼とていた。

二人は今、工学部の飯校舎の廊下を歩いている。ブレハブで急造された飯校舎は隙間が多く、真冬の冷気が吹き込んでくる。

夜々は白い息を吐きながら、とてつと雷真の前に回り込んだ。

「雷真が写真に興味を持つてゐるなんて意外でした。お望みとあらば、夜々が極めて従順な被写体になりますけど♡」

「脱ぐなよ？　ここは公共の場だからな？」

「わかっています。脱がない方が卑猥ですよね？」

「おまえは何もわかっていない！　つか、別に俺が撮りたいわけじゃなくて」

「撮りたい……？　はっ、まさか……ロキさんに!?」

「違う！　もう何もかもが違う！」

「静かにしたまえ！」

不意に、第三者の声が背後から刺さった。

「廊下で騒ぐな。仮にも校舎だぞ？」

振り向くと、廊下の奥から見知った顔が歩いてくる場所だった。

燃えるような赤毛をアップに留めた女教授。まだ三十代の若さだ。

「キンバリー先生——ちょうどよかった。あなたを探してた」

「講義を受けにきた……はずもないな。夜会参加者は優雅なものだ」

今さらだが、夜会参加者は講義の出席を免除される。テストは免除されないが。

キンバリーは二人——とりわけ夜々に、注意深い眼差しを向けた。

「私を探していたと言ったな。用件は何だね？」

「ああ。実は今——」

「新婚旅行の計画を練っているんです♡」

夜々が横から口を挟む。雷真はスルーして、

「昔の写真とか、絵とか、あったら見せて欲しいんだ。先月図書館が燃えちゃったせいで、

そういうの見られなくてさ」

「風景写真かね？　とこの観光地だ？」

「万博のときの、水晶宮だ」

キンバリーは怪訝そうな顔をした。

「クリスタルパレスなら、写真など探すまでもなく、移設したものがシドナムに現存して

いるぞ。当時のままというわけではないが」

「ああ、それが何だがボロくなってさ」

先日、ロンドンでひと悶着あったとき、雷真は偶然そこへ逃げ込んでいる。だが、管理

団体が破壊したとかで、思い描いていたような美しさはなかった。

「往時の姿——って言うのか？　できれば色つきで、夜々に見せてやりたいんだ」

「雷真……夜々のために……」

きゅんっ、と夜々の胸が鳴る。雷真は照れくさくなってそっばを向いた。

今回ばかりは、その通りだ。どうしても今、夜々に見せてやりたい。

「君が人形を気遣うなんて、どういう風の吹き回し……なんて、訊くまでもないな」

ほんの「瞬」キンバリーはいたわるような目を向けた。すぐに普段の調子に戻り、

「ならば、おあつらえ向きのものがある。大魔術師ラブラスの遺産だ」

「ラブラス……って誰だ？ 有名人？」

「君は少し勉強したまえ。数学者としても天文学者としても名を馳せた人物だ。彼が晩年に考案した魔術理論に『ラブラス変換』というのがある」

ややこしくなりそうだな……と思つて、雷真は無意識に聞き流す態勢に入る。もちろんキンバリーには筒抜けだったようで、苦笑されてしまった。

「至極簡単に言えば、『未来を予測する』ための魔術だよ。魔術師協会はもちろん、学院も熱心にこれを研究した。――が、著しく信頼性に欠けていたため、頓挫した。最終的に、未来予知の役には立たないと結論づけてな」

「へえ……それが水晶宮どう関係するんだよう」

「未来の前提は現在であり過去――予知の精度を上げるため、前提となる（現在）の情報を熱心に収集したんだ。ちよと万博の頃、現地で集めた記録もある……はずだ。当時の

水晶宮の姿も、そこに収蔵されているだろう」

「……マジかよ。すげえな。研究のスケールがでかすぎて、想像つかねえ」

さすが、世界最高の魔術学院を標榜するだけのことはある。

キンバリーは自分の指輪を外し、雷真に差し出した。

「……これは？」

「私のIDが刻印されたリングだ。教授権限で入れる区画なら、マスターキーとして使える。勝手に保管所へ行って、探すといい」

「身分証明の指輪……か。その手の魔具は、あんまい印象がねえな……」

「私には次の講義がある。手伝ってやるわけにはいかない。――ああ、言っておくが、君を信用して貸したんだ。おかしい真似はするなよ」

「わかつてる。ありがとう」

早速、夜々を連れて向かうとする。その背中に、キンバリーが言った。

「『ラブラス変換』の魔具は重要機巧保管施設にある。あれは史学部の管轄だから、地下区画――DⅢ層のどこかな。あの区画には『囚人』を千年幽閉する『監』だとか、『迷宮を生み出す魔鏡』だとか、物騒なブツも多いので注意しろ」

「おい！ 洒落にならねえことサラッと言ったぞー！ 」

「問題の部屋には、一緒にマニュアルもあるはずだ。熟読してから起動しろ。くれぐれも、

壊すことのないように」

「雷真と夜々は低頭してキンバリーと別れ、工学部の仮校舎を後にした。その足で学院の中核、重要機巧保管施設へ向かう。

道行き、夜々は瞳を輝かせて言った。

「すごいですね、昔の情報がたくさん入ってる道具なんて」

「どんな見た目なんだろうな。百科事典……みたいな感じなのかね？」

「わくわくします！」

夜々が嬉しそうなので、雷真の足取りも軽くなる。

やがて、コンクリートで造られた、箱型の威容が見えてくる。その墓標のような建造物こそ、重要機巧保管施設だ。

警備員に事情を話し、キンバリーのリングを見せて、中に入れてもらう。窓のない屋内は鉄とオイルのにおいが充満していた。不親切な案内板を頼りに、昇降機で地下へ。電気の照明をつけると、回廊状の通路に、無数の扉が浮かび上がった。

「ここがDⅢ階か。やたら部屋が多いな」

扉には部屋番号が振られている。だが、中に何があるのかは記されていない。

「どの扉だよ……？」

「ひとつずつ聞いてみるしかないですね……」

夜々の言う通りだ。二人は手当たり次第に扉を開けた。キンバリーのリングでノブに触れると、それだけでロックが解除される仕組みだ。

各部屋は一〇メートル四方くらいの広さで、書庫や倉庫になっている。倉庫には魔具が整頓して収められ、水晶玉やカード、魔石や指輪が目についた。

中身もすこいが、雷真は出入口の機巧装置に感心した。内部にいるあいだは鏡が閉まらないのに、部屋を出ると自動でロックがかかる。上層フロア——学生の自動人形を預かる区画には、こんなセキュリティは存在しなかった。

こも違う、そつちも違う、と言いながら、七つ目の部屋に入ったとき、

「あ、鏡です」

夜々の声が弾む。その言葉通り、部屋の中央に大きな姿見の鏡が置かれていた。

床には巨大な魔法円が描かれ、壁には謎の紋式が刻まれている。鏡の手前には、譜面台のような書机があり、そこに分厚い本が置かれていた。

「マニユアルって、これですよね？」

「らしいな。タイトルは〈偉大な大魔法に捧ぐ因果の解法——〉」

わけのわからない書名だが、はつきり「ラプラス」とある。間違いない。

雷真は本を開いてみた。目を細くしたり、見開いたり、近付いたり遠ざけたり、老眼の人みいたない動きをした後で、ほんと相棒の胸に押しつける。

「……悪い、夜々。解説してくれ」

「任せてください」

英語の読み書きが不自由な雷真に代わり、夜々が音読する。

やはり、この鏡こそが、目的の魔具だった。未来予知の機能は信頼性に欠けるが、集積した情報を引き出すのは、簡単な魔術式で実行可能らしい。

「簡単な——つっても魔術式を書かされるんだろ？ 魔具じゃなくて自動人形にしてくれりゃ、制御は人形に丸投げできるんだよね……」

「文法はここに載ってますよ。このくらいなら、夜々にもわかりそうです」

「……いつも思うけどよ、おまえってだいたい面白いな」

「そ、それはどうも……」

照れ照れ、夜々はマニュアルを片手に、上機嫌でスクリプトを書き上げた。

付属のチャートで魔法陣に呪文を書き足す。早速、雷真が魔力を流してみた——

が、何も起こらなかった。

「うんともすんとも言わねえぞ」

「構文は合ってると思います。一八五一年当時のロンドン、第一回万博……ひょっとして、該当するデータが存在しないんでしょうか？ それとも、もう壊れて……」

夜々がしょんぼりする。雷真は気の毒になつて、相棒の肩を叩いた。

「もう一度マニュアルを読んでみようぜ。こういうときは、えーと……『故障かなと思つたら』叩いて直すその前に——胡散臭い見出しだな！」

だが、まさにその項に、答えが記されていた。

「魔力を流しても回路が起動しない——魔力は十分に足りていますか？ 本魔具は儀式魔術専用です」

つて、なるほど、そりゃそうだ！

雷真は改めて足もとを見た。魔法陣を構築して行う大規模魔術だ、これは。

「ここ見てください。マニュアルによると、十人ぶんの魔力が必要——だそうです」

「十人？ 何だ、そんなもんか」

雷真ははっとして制服の袖をまくった。まだ包帯の残る腕を叩き、

「任せろ。俺が十人分つてところを見せてやる」

「だ、大丈夫ですか？ 雷真、まだ体力が戻ってないんじゃないや……？」

「大丈夫だ。この程度のこと、屁でもねえ」

おまえのためなら——なんて言葉はさすがに言えない。だが、夜々には伝わっているようで、黒い瞳を過らせて、こくりとうなずいた。

「よし、やるぞ」

雷真は印を結び、氣息を整え、丹田に魔力を集中した。

両手を開いて突き出す。生き血が魔力が変換され、大出力となる。膨張した魔力は体内

で収束し、細い糸となつて、雷眞の指先から放出された。

十本の傀儡糸が魔法円に流れ込む。魔術式が輝き、二人の姿を青白く染め上げた。鏡が水面のように揺らめき、おぼろげに像を結び始める。

「お……何か……視えてきたぞ！」

情報とやらは鏡に映し出されるようだ。思わず身を乗り出し、鏡に顔を近づける二人。そのとき突然、鏡から白い腕が飛び出して、夜々の頭を抱きかかえた。

あつと思ふ間もない。夜々は鏡の中に引きずり込まれてしまふ。雷眞はとっさに相棒の手をつかんだが、勢いは止まらず、自身も鏡面に飛び込む破目になった。

書机が倒れ、ばさりと、とマニュアルが床に落ちる。

静寂が室内に満ち——それっきり、部屋には誰もいなくなつた。

## 2

「いろり姉さま、落ち着いて！ 姉さまがあわてても仕方ないよ！」

「あ、あわててなどおらぬ。そもそも、おお落ち着いてなどいられぬ！」

「どっち!? わかつてるけど！」

「夜々！——夜々！——どこだ！」

悲痛な声がこだまする。何事かと振り返る学生たち——その視線の先に、二人の乙女の姿があつた。どちらとも和装の日本製自動人形で、青みがかった銀髪のいろりと、紅葉色の髪の小髷。二人は夜々の姉妹であり、雪月花の《雪》と《花》だ。

二人が近づいてくるのを、キンバリーは頭痛をこらえながら眺めていた。

「そんなに叫ぶな。学生たちが何事かと思うだろう」

まして、大きな戦いの後だ。学内はどろりしている。

小紫が気付く、はつの悪そうな顔をした。

「お助けくださいキンバリー殿！ 後生です！」

いろりがすがりついてくる。とつくに半そをかいていた。

「夜々が朝から見当たらず……もしものことがあつたら、私は……私は……この機巧都市を永久凍土に沈めてしまいます……っ」

「……相変わらずだな。いや、重症化しているのか。花柳斎殿は——査問中か」

保護者不在、つまりは暴走し放題。

放置するわけにもいかず、キンバリーは答えを教えてやった。

「夜々とライシンならば、重要機巧保管施設にいる」

ぱつというりの顔が明るくなった。



「それはよきことを聞きました。恩に着ます。では、私はこれで——」

「待て待て。あそこは仮にも学院の中核、許可なく入ることはできない」

「ご心配なく、このいろり、そこらの警備員などに後れはとりません」

「……頭の中身が心配だぞ。何をやらかすつもりだね」

ため息が出る。キンバリーは視線をとなりに移し、小紫に言った。

「花の乙女、おまえが面倒を見る。警備には私から連絡をつけておく。二人がいるのはD

Ⅲ層のどこか——鍵のあいている部屋にいるだろう」

「はい——だって、姉さま、よかったね！」

「あ、ありがとうございます……キンバリー殿……」

感涙にむせび泣くいろり。その背中を、小紫が押していく。

「夜々のやつめ、心配をかけおつて……見つけたらきつくお灸を据えねばつ」

いろりは嬉しそうに言つて、妹に支えられ、重要機巧保管施設へ向かう。

「のだが。」

わずかに一〇分後、戻ってきたいろりは、またしても涙目だった。

「キンバリー殿！ あいている部屋に夜々がおりません！ 雷真殿も……」

キンバリーは次の講義に備え、プリントを刷っているとこらだった。いささか辟易する

一方、きな臭いにおいも嗅ぎ取っている。

まさか、トラプル——？

危険度の高い魔具は、もつと嚴重に封印されている。だが、安全とされている、扱い方を間違えれば、危険な現象に見舞われる。魔具とはそういうシロモノだ。

まして、本当に危険なフツに手を出した可能性もある。

（今の彼らは、軽い封印くらい難なく破つてしまうから……）

キンバリーは作業の手を止め、重い腰を上げた。

「仕方ない。行ってみるか」

「お仕事の邪魔して、ごめんさい」

小紫がしおらしく謝る。キンバリーは苦笑した。

「かまわんよ。このまま雪の乙女を放置しては、校舎が凍りついてしまう」

いろりを示す。いろりの全身からは、抑えきれない冷気が漏れ出していた。彼女が内蔵

する（氷面鏡）は、凶悪な冷却性能を秘めているのだ。

事務方に休講の連絡をして、姉妹とともに重要機巧保管施設へ向かう。警備員に事情を

説明し、マスターキーを借り受けて、DⅢ層へと降りた。

同じような扉の前をいくつも通り過ぎ、目的の場所を目指す。

「確か——ここだと思つたが」

ひとまず、目についたノブをひねる。がちり、と硬い手こたえが返ってきた。

「これは施錠されているな。中から手動でロックもできるが……」

「先生、あいてるのはこつちだよ？」

小紫がひとつ後ろの扉を開けている。通り過ぎていたようだ。

そちらの部屋に入ると、まず最初に、大きな鏡が目に飛び込んだ。

「ああ……誰かにこれが〈予見の鏡〉オラクリオンだ」

もつとも、「予見」と呼べるほどの未来予知はできず、近頃は単なる大容量の情報記録媒体として認識されている。

キンバリーは注意深く床を観察した。

「積もったばかりに足跡が残っている。二人がここを訪れたのは間違いない……が、肝心の本人たちがいないな」

部屋には鏡と書机があるだけで、人間が随えられるようなスペースはない。

もし雷真がこの部屋を後にしたのなら、自動で施錠されたはず。

（何者かに転移で連れ去られた……？　だが、この建物は魔術的に遮断されている。境界を貫通して転移できたなら、それはよほどの実力者だ）

キンバリーの脳裏に警報が鳴り響いた。

そんな芸当ができるのは、魔術結社〈薔薇の師團〉の者か、狂王エドマンドの手の者か、それとも、その二つに該当しない——新たな敵か。

そのとき、雪月花のセンサーと、キンバリーの第六感が、同時に気配を察知した。  
誰かが廊下にいる。息を潜め、こちらをうかがっている！  
「夜々か！」  
いろりが部屋から飛び出す。小紫とキンバリーも、急いでその後を追った。  
長い回廊に、乙女がひっそりと立っていた。  
逃げるか、とどまるか、躊躇したようにも見える。だが、結局は逃げず、薄紺の面覆い越しにこちらの出方を見ている。  
黒いドレスを身にまとい、髪は薄桃色。存在自体が凄みを放つ、精緻な自動人形。それは雷真の宿敵マグナスが操る〈戦隊〉の一体で——  
「火垂！」

### 3

「姉さまっ、だめー！」

と小紫は叫んだのだが、いろりはもう己の魔術回路を起動していた。

一帯の空気がキラキラと輝く——空気中の水分が凍っている！

「馬鹿者が……！」

小紫の背後でキンバリーがばやき、とつさに魔力を高める。いろりが放った冷気は、水の槍となつて火垂へ飛び、床一面にびつしりと霧が降りた。

火垂は左手を突き出しただけで、氷槍を受け止めた。槍はてのひらにぶつかることなく、その直前で蒸発してしまふ。

立ちこめる水蒸気を吹き飛ばし、火垂が高速で突っ込んでくる。いろりは冷気で迎撃しようとしたが、その両者のあいだに、キンバリーが割って入った。

いつの間にか抜いたのか、ダガーと拳銃を抜いている。切っ先をいろりに、銃口を火垂に突きつけて、キンバリーは冷やかに言った。

「私はバカが嫌いだ。重要機巧の保管所だぞ、ここは」

よくよく見れば、キンバリーの魔力が廊下全体を覆い、壁や床を保護していた。いろりの冷気は建物を傷つけることなく、その直前で防がれている。

恐るべき魔術防衛。そのぶん疲労はさげられず、さすがのキンバリーにも汗の玉が浮いている。いろりは我に返り、たちまち恐縮した。

「もつ、申し訳ありません……。しかし、ひよつとしたら、火垂が夜々を……」

「口答えするな！ 防衛装置が作動すれば、ただちに警備に拘束される。魔術喰い騒動のとき、夜々がここでどんな目に遭つたか知らないのか？」

「……面目しだいありません」

いろりが提まる。小紫はちよつと可笑しくなった。普段は落着いていて、夜々を叱る個のいろりが、こんなにも取り乱し、叱られる個に回っている。

それだけ夜々が心配なのだ。それはとても温かくて——とても切ない。鼻の奥がつんとして、泣きそうになる。そうしているうちに、キンバリーが火垂を問詰めていた。

「おまえもだ。反撃しようとしておいて、正当防衛などとは言うなよ」

「……お言葉ですが教授、先制攻撃をしにかけてきたのはそちらです」

「おまえは傷ひとつ負わなかつただろう。雪の乙女も手加減したんだ。——おまえは一人できたのかね？ マグナスはどうした？」

火垂は答えなかった。

「（下から）『番目』の行方を知っているのか？」

「……………」

「だんまりか。別にそれでもかまわんが——登録人形が不法侵入した以上、私がその氣になれば、マグナスに処分を加えることもできる」

まさに、殺し文句。火垂は決々といったふうに、重い口を開いた。

「……（下から）『番目』の行方は知りません」

「ほう。ここで何をしていた？」

「私は……マスターの命で、（下から二番目）を監視していました」

嘘とも思えない。戦隊は常に雷真の動きをマークしているのだ。

それはキンバリーも知っていたようで、あきれ顔でため息をついた。

「天才くんは相変わらずあいつにご執心というわけか……。では、（下から二番目）たちをおまえも見失ったということだな？」

「……ここに入るころまでは、確認しました」

火垂はずっと建物の入り口を見張っていたぞうだ。雷真が出てこないまま、いろりが出入りし、キンバリーまでやってきたので、中に様子を見にきたらしい。

つまり、雷真も夜々も――

「まだこの中にいる、ということか……」

キンバリーが部屋を振り向く。室内はやはり無人で、鏡が置かれているだけだ。

「手がかりを探す。君たちは廊下に入たまえ」

三体の乙女型自動人形は大人しく従い、回廊からキンバリーの調査を見守った。

「……解せん。転移を可能とするような、高レベルの魔具はない。魔術式が途中で転移術式に誤読されている様子もない。シンタクスエラーも……ない」

独り言を言いながら、調査を続けるキンバリー。その後ろで、いろりがもじもじと、恥ずかしそうに口を開いた。

「ほ、火垂……」

「何か」

機械的な声が返ってくる。ヴェールの下には冷たい双眸があった。

「そ、その……先ほどは、疑って……すまなかったな」

謝る。火垂は面食らったような顔をした。

いろりはふわっと目をなごませ、微笑んだ。

「元氣そうでよかった。体はもう、いいのか？」

「……ええ」

「そうか。そ、それだけだ」

「あ……」

きびすを返し、離れていくいろり。伸ばしかけた火垂の手が泳ぐ――自分でも滑溜だと

思ったように、火垂はあわててその手をつかみ、引き戻した。

その一部始終を、小紫がばっちり目撃していた。

火垂と目が合う。小紫はぎくりとして、とりあえず、

「えへっ♡」

笑ってごまかした。怒るかな、と思ったが、火垂は何も言わず、顔を仰げた。

ヴェールのせいで、表情がよく見えないけれど――

薄桃色の髪にまぎれて、耳が赤くなっている。小紫は意外の念に打たれた。  
 「(戦隊)さんって、機械みたいで、ちょっと怖い感じだったけど……」

ひよっとしたら、わかり合えるのではないか？

外見や製造コンセプト同様、精神構造も雪月花と似ているのでは？

だが、たとえ戦隊と雪月花が似ているのだとしても、わかり合える存在だとしても、主たちが敵同士だ。雷真とマグナスは血で血を洗う殺し合いをするだろう。

その日は近い。わずか七日のち、決戦のときはくる。

実戦になれば、皆隠事は言っていられない。やらなければ、やられる。

小紫は自分の腰の後ろ、銀剣を意識した。

今は亡き友の形見——この剣で、小紫が火垂を斬ることも、あるかもしれない。

暗澹たる気分になる。待ち受ける過酷な未来に、小さな胸を痛めていると、

「手がかりがないな。お手上げだ」

肩をすくめながら、キンバリーが廊下に戻ってきた。

「上に報告した方がいい。これはもう失踪事件だ」

「ふっふっふ……どうやら私たちの出番のようね！」

と、閑々たる声が廊下に響き渡った。

なめらかな金髪を艶然と輝かせ、女子学生が歩いてくる。彼女が現れただけで、周囲が

明るくなったような気がした。

輝くような美少女だ。ただし、胸は控えた。そして、それすら偽物だ。

普段の青い帽子ではなく、鹿撃ち帽をかぶっている。帽子の上には剣色の仔竜——自動人形シグムントが乗っていた。

「事件と聞いている黙ってられないわ。そうでしょう、ワトソンくん！」

キンバリーは目をすがめ、とがめるように言った。

「なぜここに、シャルロット」

「キンバリー先生、話はすべて聞かせてもらいました」

「盗み聞きで、かね？」

「ち、違います！ たまたまっ」

「こんな場所にたまたま現れるはずがないだろう。気配を隠して、つけていたのか。腕を上げたのは認めるが……便利な力は人を堕落させるな」

守護精霊を得たシャルは、先祖譲りの才能を開花させ、めきめき力をつけていた。遠方の音を風の精霊に察めさせるなど、造作もない。

シャルは羞恥に頬を染めたが、すぐさま勢いを取り戻し、

「ともかくっ、失踪事件は私が解決に導くわー！ このシャーロット・ホームズがねー」

鹿撃ち帽の上で、仔竜の姿のシグムントが頭を下げた。

「すまない。染まりやすい性格なのだ。アンリの看病がてら、読書熱が再燃して——」  
 「黙りなさいシグムント、余計なことは言わなくていいの。そんなことより事件よ、事件。これって死体とか出てきちゃうパターンかしらっ？」

実際に死体を見たら引っくり返りそうなものだが、シャルは嬉々として言った。  
 「そ、その死体は、夜々と雷真殿です……シャルロット殿……っ」

早くも泣きべそをかきながら、いろりが控えめにツッコミを入れた。

## 4

シャルは虫眼鏡を取り出して、早速、事件現場の観察を始めた。

「……ずいぶん現場を荒らしてくれたわね。足跡が多すぎよ！」

同じようなサイズの足跡が重なって、どれが誰のものだか、わかりにくい。だが、小衆といろりは下駄だし、火垂は部屋に入っていないので、かろうじて判別できる。

キンバリーは苦笑しながら、

「どうだね、ホームズくん？ 手がかりは見つかったかな？」

「……気になることは……あります」

ヒントを見つけたのか。探偵小説を読み耽った後だけに、頭は冴えているようだ。

「この一番大きな足跡、部屋の外に出てないわ。夜々……らしきブーツの跡も」  
 つまり、雷真と夜々はまだ部屋の外に出ていない？

シャルは嬉しそうに身震いした。

「つく……………これって（雪密室）の変形よね！ 普通に考えれば、あいつらはまだこの部屋の中にいる——だけど、（明白な事実ほど錯誤を招きやすいものはない）わ

いかにも引用めいたことを言って、シャルは部屋の中央、鏡に近付いた。

「何と言っても、この鏡が怪しいわね。これに何か、錯誤が潜んでいるはず……」

「なぜ、そう思う？」

「魔術師の直感です！」

堂々たる宣言を聞いて、シグムントがあきれた様子でつぶやいた。

「シャルよ。当てずっぽうは確か、ホームズのもっとも嫌うところでは——」

「鏡を使ったトリックなんて基本中の基本だわ。絶対何か仕掛けてるわよ」

「ホームズは確か、先人観を持って事に当てるのはよくない、とも——」

シグムントの指摘を無視して、シャルは鏡をのぞき込む。

魔力の残滓が漂ってるから、起動したのは間違いないわ……先生、この魔具は？」

キンバリーはマニュアルを拾い上げ、雷真にしたのと同じ説明をしゃべった。

集積した情報にアクセスし、記録された映像を映し出すものだ。と。

「それは……本当ですか？」

「なぜ、疑う？」

「たとえば、もしこれが転移の魔術——別の場所に続く『門』のようなものなら、あいづらがここから消えた理由は簡単に説明できます」

「合理的だね。だが、魔術回路の専門家たる私が、こうして監視して見ても——転移魔術の魔術式は見当たらない。この回路はやはり、オラクリオンだ」

「あの……」

黙って成り行きを見守っていたろりが、遠慮がちに手をあげた。

「夜々と雷真殿は、本当に部屋の外に出ていないのでしょうか？ キンバリー殿は先ほど、この部屋の鍵は、自動でかかるとおっしゃいました」

「言ったな。マスターキーが入り口を通過すると、鍵がかかる仕組みだ」

「では、あの指輪をこの部屋のどこかに隠しておけば……？」

指輪を置いて、本人だけが外に出る。それならば、部屋は施錠されないうまま、どこへでも行けるというわけだ。

いろりのとなりで小紫が首をひねった。

「だけど、足跡を残さず外に出る方法って、ある？」

「あるわよ。念動で浮いて行けばいいじゃない……くっ、何てつまらない結論……！」

シャルが海しがる。《雪密室》とやらは、魔術師には無効だ。

「だけど、部屋を出たって意味ないわよ。だつて——」

廊下の火垂に視線をやる。視線に気付き、火垂が「何か？」という顔をした。

「仮に部屋を出たのだとしても、この重要機巧保管施設の外には出ていない……。それはあの戦隊が証言していることよ。そもそも、イロリの言う通りなら、この部屋のどこかに教授の指輪があるはず

シャルが部屋を見回す。ひとまず、目につくところには存在しないし、キンバリーにも見つけられない。ただし、小さなもので、隠す手段はありそうだ。

いろりもそう思ったようで、さらにシャルに言った。

「……魔術で隠しているのでは？ 小紫の《八重巻》を用いれば、簡単です」

「コムササキはそこにいるじゃないの」

「類似の魔術があるでしょう。この建物のどこかで見つけたのかも……」

「それこそ、あり得ないわね」

シャルは自信たっぷりに言い切った。キンバリーは意外に思っ

「なぜ断言できる？」

「なぜなら！ そんなご都合主義的なアイテムが！ ノーヒントでいきなり飛び出すなんて、探偵小説的にフェアじゃないからよ！」

「……極めて正しい参説だ」

「同じ理由で『誰にも気付かれない抜け穴がありました』なんてのもダメ」

「シャルよ、これは探偵小説ではない」

シグムントの冷静なツツコミを聞き流し、シャルはびしっと廊下を示した。

「だから、手がかりはこの部屋の外にあるわ」

えっと驚く一瞬の前を素通りし、シャルは悠々と回廊に出た。となりの部屋——先ほどキンバリーが入ろうとした部屋に行き、ぱんつと扉を叩く。

「さあ先生、この扉を開けてー！ 私の推理が正しいければ、あいつらはこの部屋でいかがい行為に就<sub>つ</sub>ているはず……！」

「……飛躍しすぎたな。なぜ、そこなんだね？」

「これ見よがしに同じ形の小部屋が並んでいるのに、部屋の取り違えが起こらないなんて物足りないわ。このプロットは生かされるべきよ」

そんなわけはないだろう、と思いながら、キンバリーはマスターキーで開錠する。

「——ビング」

がらんとした部屋の中央に、大きな姿見の鏡が鎮座していた。

床には複雑な魔術式が描かれ、鏡の前には譜面台のような書机。そこから落ちたと思われのマニアルが一冊、床に放置されている。

先ほどまでいた部屋と、まったく同じだ。鏡の位置や壁の汚れ、誰かが書き足した魔術式——挙げ句、皆がつけた足跡まで！

びよこんつと小紫が飛び跳ね、驚きをあらわにした。

「シャルロットさん、すっごーい！」

「えっ!? そ、そ、そうねー まあねー」

明らかにシャル自身も驚いている。——推理とやらはどうした。

「だけど……あいつら、いないわね……？」

シャルはあごに手を当て、考え込んだ。

「取り違えのトリックだとすると……この部屋を特徴づけるのは鏡だから……犯人は鏡を一枚用意して、私たちを騙した……？」

思考を整理している。その横で、キンバリーも頭をフル回転させていた。

この部屋は本当に、『何から何まで』となりと同じだ。雷具と夜々の足跡はともかく、キンバリーたちの足跡まで、そっくり同じ——入ってすらいらないのに、だ。こんなことは、普通に起こらない。記憶を引っくり返し、部屋の由来を思い出す。

この部屋に保管されているのは、何の魔具だ？

(そうか……そういうことか……！)

「謎は解けたわー」



キンバリーが結論に達すると同時に、シャルが叫んだ。

「つまり、これは初めから計画的犯行だったのよ！」

「いろりと小紫が息をのむ。シャルは名探偵よろしく、もったいぶって語り出した。

「学院が荒れ果てて、寮も仮住まいで、なかなか二人つきりにならないからって、ここにイチャコラする魂胆だったのね……許さない！」

いきなり実行が怪しくなる。「同は半信半疑——二信八疑くらい——だったが、一応はささきらずに続きを聞いた。

「あの二人の小賢しいところは、最初から鍵の開いていた方——ダミーの部屋を用意して、いざってときの時間稼ぎに充てたところね。私たちがとなりでわききり言ってるとき、この部屋にいて、逃げ出した。ここの部屋が施錠されていたのは、中から手動で鍵をかけただけ。本当は、ここですつといかがわしいことを——」

「あの……ですが、ここにいたはずの夜々と重真殿は……どちらに？」

「いろりがつぶやく。仮に脱出したのなら、廊下の火垂と鉢合わせしたはずだ。

「えっ？ ええつと、それは……」

シャルの眼が泳ぐ。ややあつて、びんと指を立てた。

「そう！ 両方ともが時間稼ぎ！ わざわざ謎を用意して、自分たちは最初からどこかでいかがわしいことを——」

「……どこか、とはどこですか？ 建物の出入口は火垂が見張っていましたが」

「ええつと、ううんつと——あ、もうひとつ出口があるじゃないの。地下に」

「ええつ？ さっき、抜け穴はダメだと……」

「とつ、とんでもなく盲点な場所ならいいのよ。それに、ここが地下空洞につながってるのは既出情報でしょ？」

「それはこたびの騒動とは無関係の情報です。アンフェアです」

「うるさいわね！ これは探偵小説じゃないわよ！ 事実は小説より奇なりよ！」

生温かい視線がシャルを包む。シャルはついにカプト 鹿撃ち帽を脱いだ。

「た、探偵は廃棄するわよ。それで文句ないでしょ！」

言い終わると同時に、凄まじい閃光が地下に走った。

光芒とともに魔力の波が伝わってくる。魔力の発生源は隣室だ。

キンバリーはふところのダガーに手をやり、となりの部屋に飛び込んだ。

鏡の魔具の前で、尻餅をついている者がいる。その胸の中には彼の相棒の乙女がいて、いわゆる〈お姫さま抱っこ〉の体勢だった。

「ててて……先生？ 血相変えて、どうしたんだ？」

こちらに気付いて、怪訝そうな顔をする。それはまぎれもなく——重真だった。

わけがわからず、雷真は相棒と顔を見合わせた。

ちよつとした冒険の後、無事にもこの世界に戻ってみると、大勢の顔見知りにもまれていた。驚いた様子のキンバリー、涙ぐむいろり、ほつと安堵の息をつく小紫。廊下には火垂の姿もある。シグムントを連れたいシャルは、なぜか顔面蒼白だ。

「ど、どうやら……現場を押さえてしまったような……！」

「あ？ 何の現場だよ？」

「探偵が駆けつけたときには、犯行は既に『なされた後』……探偵は常に敗北を強いられる——そのテーマを破って、現場を押さえてしまうなんて！」

「おい！ 犯行って何だ！」

「しらはつくれないで！ 周到に私たちを欺いて……私たちの気配を感じながら、隠れてするのが興々するのね！ 信じられないっ不潔！」

「何が!? 何をするんだ!?」

戸惑う雷真の腕の中で、夜々は恥じらいの表情を見せ、雷真の胸を突ついた。

「も、シャルロットさんたら、ヤ・キ・モ・チ」

「こら夜々、事態をややこしくするな」

「ややこしい——夜々だけに？」

「……わざわざ日本語でつまらない洒落を言うな」

「やや子をつくってました！」

「洒落にならない洒落を言うな」

意味がわからず、きよんとするシャルとキンバリー。ほかの者には日本語がわかってしまうので、夜々の危険な発言は乙女型自動人形たちに共有されてしまった。

「……なるほど、よくわかりました」

抑揚とともに温度まで消えた声で、いろりが言う。ただならぬ気配に、雷真ばかりが、シャルまでたじろいだ。

「ちょ……イロリ？ 何かちよつと……急に寒くなったんだけど」

「シャルロット殿のご慧眼には感服いたします。どうやら貴女の推理通り、二人はいかがわしいことをしていたようです……ふふ」

「わ、わかればいいのよ。だけど、何か……怒ってない？」

「おおお怒ってなどおりません。こここのいろり、妹の幸福を喜べないほど、了見の狭い女では決してなくっ」

「姉さまは、すねてるだけだよな？ 自分が蚊帳の外に置かれちゃって」

小紫が茶化す。四星を指されたのか、色白のいろりが真っ赤になった。あうあうと何か

を言おうとしたが、上手い言い逃れが思いつかない。周囲の視線——特に火垂の目に耐えかねた様子で、いろりは完全に自分を見失った。

「わたっ、私はただ……う……わう……う……やあー！」

人格崩壊。いろりは謎の奇声を発し、猛烈な冷気をまき散らした。

破滅的な予感が空間を支配する。(氷・面鏡)が全開の力を出せば、こんな小さな部屋、マイナス二百度にも達するだろう。

「やめろ！ 俺はもう魔力がカラ——そうだ火垂、おまえの魔術で抑え込んでくれ！」

火垂に助けを求めたが、火垂は冷め切った、虫ケラを見るような目をした。

「今回のこと、マスターにはそのように報告します」

「えっ、何が？ 火垂待て！ 見捨てな！」

それきり雷真を一顧だにせず、火垂は素早く離脱した。

わけがわからなまま、雷真は冷気の渦にのみ込まれる。とんだ災難だと思いが、この滅茶苦茶な展開に、懐かしい日常を感じたのもまた、事実だった。

「どうやら不思議の片方は、こいつで説明がつきそうだ」

小さな手鏡を手、キンバリーが言う。

「迷宮を作り出す魔鏡とはつまり、これのことだったようだ。私も実物を見るのは初めて

だが、資料は閲覧したことがある」

手鏡をこちらに向ける。鏡に映った雷真は、ふてくされた顔をしていた。しもやけで頬が赤くなり、まつ毛にはまだ氷の粒が張りついている。

「これは〈ラビュリントスの鏡〉——〈空間繋連〉の魔具でな、指定した場所とそっくり同じ空間を作り出す。幻視の一種だが、触覚をも欺瞞する高等な魔術だ」

シャルは鹿撃ち相を雑巾のようにしぼりながら、悔しそうに言った。

「そんな魔術に何の意味があるって言うのよ……」

「いくらでもあるだろう。侵入者を撃退する本来の使い道はもちろん、特定エリアの監視や、特殊部隊の突入前演習にも使える。のみならず、はるか彼方をコピー対象に設定した場合、情報伝達速度が光速を超えるのではないかと、壮大な科学実験が——」

誰もついてきていないのを知り、キンバリーは嘆息した。

「まあ、その話はいい。要はその魔術の誤作動——〈下から二番目〉が大魔力を放出したせいだ、最後に使った教授が悪戯心を出したのか——ともかく、となりの部屋をまるまるコピーして、いたというわけだ。探偵小説のプロットで言えば、ただ混乱を引き起こすだけのファクターだな」

雷真と夜々は、最初から最後まで、初めの部屋にいた。隣室の魔具が誤作動したせいで、混乱を招く事態になった……というだけで。

キンバリーの理路整然たる説明を聞いて、一同に納得感が広がる。ただし、自称名探偵だけが不満げで、地団駄踏んで悔しがつていた。

「後出し設定なんて卑怯よ。そんな結末、探偵小説の読者は納得しないわ……！」

「上手く脚色したまえ。それより、<sup>セカンド</sup>二番目、今の話だが」

キンバリーは雷真と夜々を交互に見て、念を押すように訊いた。

「本当に、異空間に引きずりこまれた——と言うのか？」

雷真は部屋中央、魔具の鏡を見やつて、

「ああ、ひどい目に遭ったぜ。まあ、見たいものは見たからよしとするけどさ」

「ありし日の水晶宮——いい思い出になりました♡」

夜々がこり笑う。雷真は無意識に目を細めた。

「こいつもこう言ってるし、それ自体は問題ないんだ。問題は……」

霜焼けになった頬をさすりつつ、横目でいろりをにらむ。

いろりはびくつと伸び上がり、ひれ伏した。

「も……申し訳ありません雷真殿……とんだ早とちりを……！」

「早とちりで怪我させるのはやめろ。先生が守ってくれなきゃ、死んでたぞ」

「そうです。姉さまったら、思慮が足りません」

「おまえが言うなよ夜々！ 鏡を見ろ鏡を！」

「ど、どうかお救しください……このいろり、何でもいたしますから……！」

その言葉に、夜々が過剰に反応した。わなわなと震えながら、

「何でもするつて……それは実質、誘い受け……！」

「ちち運うぞ夜々。なな何を馬鹿な……一度に三人など、ふしだらなこと——」

「嘸み嘸みです姉さま！ あからさまに期待してます！」

姉たちのやり取りを見て、小紫が小悪魔っぽく笑った。

「じゃ、姉妹等に可愛がつてもらっちゃう？ まずは何？ お風呂？」

「な、ならぬ小紫！ 何と破廉恥な……一度に三人など、ふしだらな！」

「姉さま……それは一人ずつならOKっていう意味……？」

姉妹たちが騒ぎ出す。雷真はとぼつちりを恐れ、シャルの隣に隠れた。

「なっ、何よ！ 何接近してるのよ愛蔵！」

「ずいぶんだな。悪いがシャル、俺は先に戻るから、あいつらの注意を惹いてくれ」

なぜだか赤くなり、「……うん」と小声でうなずく。素直すぎて不気味だが、もちろん

口には出さず、雷真はそそくさと部屋を出た。

出がけ、キンバリーの不審そうな声が耳に入った。

「……やはり、おかしい話だ。この魔具には秘された効果があるのか——この件は、学院

長に報告した方がよさそうだな。……あるいは、協会の方にも」

## 6

探偵ごっここの反省会をしたいから——なんていう無理のある理屈に、キンバリーは文句を言わず、すんなりマスターキーを渡してくれた。

「勝手に魔具を使うなよ。すぐにバレルぞ」

とだけ言い残し、足早に地上へ戻って行く。

雪月花の姉妹も雷真を追い、とっくに部屋を出て行った。シャルははやる気持ちを抑え、魔鏡（オラクリオン）の前に立つ。

ばさばさとシグメントが飛んできて、鏡の上に降り立った。

「何をするつもりだ？」

「きゃん！ うううるさいわねっ、驚かさないでよ！」

「君も過去の情報が視たいのか？」

「え、過去？ ああ……そうね、おばあさまの資料とか、残ってるかも」

「違うのか。では、ひよつとして——（未来）が視たいのか？」

シャルは明らかに挙動不審になった。落ち着きを失くし、目をそらす。

「そ……んなわないでしょ。大体、未来の何を見ようって言うのよ」

「つまり、未来の配偶者を」

「何でわかるのよーっ!?」

声が裏返る。シグメントは見透かすような眼をして、じっとシャルを見た。

「なるほど、結婚相手が雷真かどうか、確かめずにいられないのだな」

「いやっ、やめて！ 私の心を見透かさないで！」

シャルは頭を抱えて逃げ惑い、畏怖の目でシグメントを見た。

「シグメント……貴方まさか、名探偵……!?」

「……ワトソンの目にも明らかだと思いが。アンリのところへ戻らなくていいのか？」

「もちろん戻るわよ。いつ目が醒めるかわからないもの。だけど……ほら、ね？ こんな

チャンスは滅多にないっていうか……ね？」

「……よほど気になるのだな。まあ君くらいの歳の少女には、ごく自然なことだ」

「べ、別に結婚なんかどうでもいいの。ほら——そう、夜会がどうなるのか！ あの馬鹿」

が無事に生き残れるのかどうか！

「いずれにせよ、雷真のことだな」

「むぐぐ……そうよ！ 悪い!?」

シャルは聞き直り、書机からマニュアルを取り上げて、バラバラと目を通した。

「どうやら、十人がかりで儀式をする——らしいわ」

「残念だったな。ここにいるのは君一人だ」

「大丈夫、私って友達がたくさんいるのよ。ヒノワ、フレイ、アリス、あの双子——この手の話ならウエストン先生やエリアーダ先生も食いつきそうだし。そもそも、私とロッチだけでもいけるかもしれないわ。あのバカは一人でやったんだし、何と言っても、ロッチは《鏡の精》なんだから。試しにやってみましょ」

己の守護精霊に呼びかけ、自身に繋る精霊感応力を引き出す。

金髪に青白い魔力の光が宿り、ふわりと勝手に浮き上がった。

高めに高めた魔力を、叩きつけるように鏡に流す。刹那、鏡の奥で光が散った。

「反応あり！ やったわ——って、ええっ!?」

女の細腕のようなものが飛び出して、シャルの頭を抱え込む。

シグムントがシャルの髪に噛みついたが、もちろんそれで引き止められるはずもなく、

二人はたちまち鏡の中に引き込まれてしまった。

光の乱舞が過ぎ去ると、室内は再び静寂に満たされた。

そうして、後には塵埃ち帽だけが残された。



機巧少女は

傷つかない

THE MECHANICAL GIRL

## あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

というわけで、付録冊子SSをお届けします。ガッツリ40Pスケール！

筆の向くまま気の向くまま、ぶらり旅の気分を書きました。実際には山岳修行ばりの過酷さでしたが、ので、気楽な感じでお楽しみいただけたら嬉しいです！

水晶宮のくだりはもちろん、こないだ掲載のコミック版エピソードを受けての発想です。あのお話がすごく可愛かったので、主役の二人にぜひ見せてあげたくありません。

中身の方は――変則的な構成でびっくりされた方もいらつしやいますかね。鏡の中で雷真と夜々が何を見たのかは、半月後にジーンンの付録でわかります（ドヤァァ！）。『鏡の国のシヤル』はまた別のとき、別の場所で……本当に書けよ海冬レイジ！

リアルな話、アンケートいっぱいきたら実現するかもね☆（ドヤァァ！※二回目）

引き続き、高城計さんの可愛くてカッコよくて燃えるコミック版をお楽しみください。

あと秋アニメもチェックしてね！ ではでは！

2013年8月 海冬レイジ



マシンドール  
機巧少女は傷つかない  
Facing "Palace Laplace I"

発行	2013年9月27日
著者	海冬レイジ
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5
©Reiji Kato 2013	



## 機巧少女は傷つかない Facing "Palace Laplace I"

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と。人形使いにより用いられる魔術。英国万博で作られた建築物・水晶宮を夜々に見せたいと考えた露真。過去の水晶宮の姿を見ることができる〈ラプラス変換〉の魔具の存在をキンバリーに教えてもらう。さっそく重要機巧保管施設に赴いた二人だったが、突然、目的の魔具に取り込まれてしまい……。事件のにおいを嗅ぎつけたシャルロットは、探偵に扮して捜査を開始。いろり・小紫・キンバリー・火垂を巻き込んで謎解きが始まったのだが――？